月日は百代の過客にして（一）

西をさむ

人並に畳のうへの月見哉

この句は、人生の哀れとおかしさを訥々と詠い続けた小林一茶が、寛政八年（一七九六年）松山に滞在していた時に詠んだ句です。

この年の五月四日から五日に掛けて京の島原、江戸の吉原と共に妓楼七十遊女約一千人の伊勢は、古市でとんでもない事件が起こりました。いわゆる油屋騒動です。では、古市はどの辺りかと言いますと、今年、第六十二回式年遷宮が執り行われました内宮と外宮のほぼ中程に有ります。こんな場所に遊郭が在ったとは少々解せませんが、お伊勢さんに参詣する事をおかげ参りと言って、「おかげさまで」とお礼を言うそうですが、何か余程いい事が有ったのではないでしょうか。ただし、その当時は、まだそんなに多くの参拝者が訪れていた訳ではありません。

さて、五月四日の夜、妓楼のひとつ油屋に美男子で医者の孫福斎（まごふくいつき）と言う醤油顔の青年（二十七）が、（油屋で醤油顔と言うのも変だが）来て、一階で遊女お紺（十六）と酒を飲み始めました。其の内、遣手婆のおまん、と言っても未だ二十八歳でしたが、お紺を二階へと連れて行きました。そう廻しです。「廻しって何？」と聞かれてもちと困りますが、遠回しに言いますと「え～と、廻しはやっぱり廻しです」。暫くすると、二階ではお紺ら遊女と阿波の藍玉商人三人とで飲めや歌えのどんちゃん騒ぎです。何故こんな場所に阿波の藍玉商人かと言いますと、伊勢から北西方向に凡そ二十キロ行くと、松阪市があります。そこは当時、松阪

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

木綿の産地で、藍染に使ったのでした。がっぽりと懐にお金を認めた三人は、毎年伊勢参りに託けて古市に寄っていたのでしょう。治まらないのは、斎の方です。「帰る」と言って預けていた刀を受け取ると、おまんを脅すつもりでさっと刀を抜いて突き出しました。びっくりしたおまんは、自分を庇う様に手を差し出すと、おまんの指から血が吹き出しました。それからは何が何だか解らなくなった斎は、次々と八人に斬り付けて三人を斬殺したのでした。さて、ここからが私の持論ですが、この事件から僅か十日後、際物として松阪の芝居小屋に掛かったのです。その後「伊勢音頭恋寝刃」として歌舞伎にも成り、現在に至っています。脚色に脚色を重ね、医師・孫福斎が出来上がったのです。

その日は、端午の節句で、一世一代の大芝居を斎は、打ったのです。でもその裏には何か有りそうです。俳人・中川乙由もその一人でしたが、御師と言う人々が居て、津々浦々に伊勢参りを広め様としていました。この油屋騒動は伊勢参りの宣伝の為の遣らせだったのではないでしょうか。実際、その後、伊勢参りは、抜け参り、おかげ参りとして急激に増えていったのです。

この様にして、人間の哀れとおかしさは芸術を育ててゆくのです。それから百四十年後、二・二六事件が起こりました。

（次号につづく）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。